【ライフプラン講演会抄録】

「本なんて読まなくたっていいのだけれど」

平成27年5月18日、東京・千代田区のホテルルポール麹町で、恒例のライフプラン講演会が開催されました。今年は有限会社BACH（バッハ）代表でブックディレクターの幅允孝さんをお迎えして「本なんて読まなくたっていいのだけれど」をテーマにお話をうかがいました。

幅 允孝
有限会社 BACH（バッハ）代表

【はば よしたか】1976年愛知県津島市生まれ。有限会社BACH（バッハ）代表。ブックディレクター。未知なる本を手にしてもらう機会をつくるため、本屋と異業種を結びつけたり、病院や企業ライブラリーの制作をしている。代表的な場所として、国立新美術館『SOUVENIR FROM TOKYO』や『Brooklyn Parlor』、伊勢丹新宿店『ビューティアポセカリー』、『CIBONE』、『la kagu』など。その活動範囲は本の居場所と共に多岐にわたり、編集、執筆も手掛けている。著書に『本なんて読まなくたっていいのだけれど、』、『幅書店の88冊』、『つかう本』。『本の声を聴け ブックディレクター幅允孝の仕事』（著・高瀬毅／文藝春秋）も刊行中。愛知県立芸術大学非常勤講師。www.bach-inc.com

皆さんこんにちは。私はブックディレクターとして、いろんな場所に図書館や本屋さんをつくる仕事をしています。今日は本の届け方についてお話させていただきますので、皆さんは自分が届けたいものは何か、それはどうしたら届けられるのだろうと考えながら聞いていただければ幸いです。

私は六本木にある青山ブックセンターという大型書店に2002年まで勤めていました。2000年にAmazon日本版ができ、インターネットで本を買う時代が到来しました。来客数が減るに従い、本屋さんを巡る熱が冷めてきている状況に私は危機感を覚えました。人が来るのを待っているのではなく、人がいる場所に本を持っていったほうがいいのではないかと考え、現在の仕事を始めました。

本の販売部数が減っているのに反比例し、発行点数は増えています。昨年、国内だけで約8万タイトルの本が出版されました。出版社ごとの特色は薄れ、ある種類の本が売れると全部がその方向に流れていく中、読者にとってはどの本を手に取ったらいいのか益々わからなくなっているのではないかと思います。

検索型の今の世の中で、未知なる本に、リアルな場所で、どうやって出会ってもらい、1ページ目を開いてもらうのかというのが私の仕事です。ミュージアムショップやカフェ、セレクトショップ、学校、通院型心療内科など様々な場所で、本を手に取ってもらう機会をつくっています。

私の好きな本をただお薦めしてもおせっかいにしかならないので、届けたい相手が両手を伸ばして届く範囲に本を配置しないといけないと思っています。その第一歩として、本選びはインタビューから始めます。話を聞きながら、個の内側と外側にあるものをつなぐ「結節点」を探すことにより、相手にとって関係なかったものが、少しずつ関係を持ってくるんじゃないかと感じています。

私がどんなふうに本を届けているか、一言で言えば、「本棚を編集する」ということです。そのメソッドをご紹介します。

①セグメントの再編集

例えば、本屋さんの旅コーナーはガイドブックや地図それに旅専門のエッセイストの作品が少し並んでいるくらいです。私が最初に

携わったTSUTAYA TOKYO ROPPONGIの仕事では、いろんなジャンルから「旅」の中の「インド」のようなテーマで、既存の書店とは全く違った本の並び、セグメントを再編集しました。すると、これまでとは全く違った本が並んでいることに面白さを感じて、立ち止まっていただくことができました。その場所を通り過ぎる人のモチベーションに寄り添ったつくり方をしたことで、本との出会い方が変わったのだと思います。

②そのものを置く環境を編集する

昔は、本がたくさんあることは本屋さんの優位性でしたが、インターネット書店の出現によりその優位性は下がりました。そんな時代には本が少ないことがメリットになるのではないかと考え、羽田空港にある雑貨屋Tokyo,s Tokyoの中の本屋さんの選書では、本をできるだけ少なくしました。例えば東北ならベスト1、2、3をメインにその他はわずかに置く程度です。ある月、宮沢賢治の『風の又三郎』をベスト1で並べたところ、大変よくこの本が売れました。同じものでも差し出し方を変えることで、相手には全く違って届くのだと実感しました。

③細やかな慮りで差し出す

新宿伊勢丹百貨店のナチュラルフードなどを扱う売り場に、ナチュラルワインに関する本のコーナーをつくりました。通常の十進分類法とは違い、「きれいな酔い方」などというコピーと共に本を差し出しました。0.2秒で通り過ぎ、本を買おうという気持ちが全くない方に向かって、どんな言葉を投げかけたら立ち止まってもらえるか、必死で考えながら、一つ一つの言葉尻までを熟慮した上で、本棚をつくっています。

④意外性と身体性

人が未知の本に手を伸ばそうと思うのは、精神的な余裕や体力的な余白がある時です。ですから、身体が気持ちいい状態をつくることは、普段は届かないものを届ける時に効果的ではないかと思います。

さて、ここからは「幅的本の読み方」ということでお話します。

まずは併読についてです。1冊を最初から最後まで読まないと気が済まない人も多いかもしれませんが、私は読み進めている本を何冊か手元に準備しています。そうすると、今夜の夕食を選ぶように無理のない本を選ぶことができ、呼吸をするような自然な読書ができるのではないかと思います。

最近は、値段と読書時間と得た情報を秤にかけようとする傾向が強い気がしますが、元来、本とは「遅効の道具」なのだと思います。人生において自分でもどうしようもない不条理な波が突然押し寄せてきたような時に、ハッと開くものが引き出しの中にたくさん入っていることは、ある意味豊かなのではないかと思います。

本は一期一会で、同じ本でも二度と同じようには読めません。常に自分が変容し続け、本の読み方も変容し続けるからです。たくさん読むのもいいですが、自分に突き刺さっている本を何度も読み続けるという読書も、一つの方法じゃないかと思います。読み重ねていくことで、全く同じ本でも違った感触を得られる気がします。

本を読んで何か答えを得ようとする人が多いですが、歯ごたえのある読書というのは、本を読み終わった後に疑問が湧いてくるものです。答え探しではなく、疑問をつくり出すような読書を重ねていくと、自ずと自分が手に取る本が芋づる式につながってくるのではないかと感じています。

自分の直感に自信が持てなくなっている世の中で、本屋さんは自分の直感を発揮できる数少ない場所です。ですから、本屋さんで迷ったら、ぜひ買ってください。そして、長い目でゆっくりと本とお付き合いしていただければと思います。

ご静聴いただき、ありがとうございました。